青森県立郷土館研究紀要　第48号,25－30, 2024. 3

むつ市大川目遺跡出土の石刃素材石器

齋藤　岳[1)]

Observation of Blade Found at Okawame Site in Mutsu City

SAITO Takashi

キーワード：旧石器時代、下北半島、大川目遺跡、石刃素材石器、彫器

はじめに

青森県内の旧石器時代の石器については、1970 年代までは、主に採集資料を中心に紹介されていた。その後、大平山元Ⅱ遺跡(青森県立郷土館 1980)などの発掘資料が増加し、それらの資料に置き換わっていくことになる。

下北半島の出土品では 1959 年に刊行された書籍に、野辺地町目ノ越の長さ 17.3cm の石刃の正裏面の写真、東通村物見台遺跡のナイフ形石器・掻器等計６点の正面の写真が掲載され、広く全国に紹介された(八幡編 1959)。

その次に紹介されたのが、むつ市大川目遺跡採集の石器である。先端部側を欠失し、器種を特定できないため、本稿では石刃素材石器として記述する。1977 年に「ナイフブレイド」として文章記載がなされ(橘 1977；注１)、1978 年に岩本義雄はナイフ形石器の可能性のある石刃として正裏面ともに写真紹介した(岩本 1978；注２)。

この石器を所蔵していた故橘善光氏は、下北地域の考古学の第一人者として多くの調査を実施した。むつ市の文化財保護審議会が設けられた昭和 42 年当初から逝去されるまで、その委員を歴任された。

氏は平成 19(2007)年５月 23 日に逝去され、その後、ご遺族により所蔵の資料はむつ市に寄附された。

また、前述の物見台遺跡では、他にも１点の彫器が採集されている。当館の風韻堂コレクションに含まれており、筆者は資料紹介した(齋藤 2009；図２－１)。また当館所蔵の重要考古資料の大平山元Ⅱ遺跡の出土品には、彫器と彫器作成時に発生する削片が多数含まれている。後述するが、大川目遺跡の石刃素材石器は彫器基部の可能性もある。

そして、旧石器時代の遺跡・石器が少ない地域、本稿でとりあげた下北半島では採集資料を含めて石器を集成し、一覧できるようにすることは現在においても重要と考える。特に彫器は報告例が少なく、当館所蔵の物見台遺跡出土品と対比するためにも、本稿で集成することとした。

１　大川目遺跡出土品のこれまでの資料紹介と観察内容

筆者が調べた限りでは、大川目遺跡出土石器が最初に紹介されたのは、前述のように橘善光(1977)の『下北の古代文化』である。橘は下北各地の後期旧石器文化の石器の一つとして「むつ市大川目遺跡からはナイフブレード」が発見されていると記載した。一方、岩本義雄(1977)は青森県内の先土器時代の遺跡一覧表（「昭和 51 年 12 月製作」とキャプションのある表)の中で「大川目(むつ市)」と遺跡名を記載した。これらにより、青森県内で知られるようになった。

さらに岩本(1978)は、前述のように大川目遺跡の石器の発見の経緯や石器の特徴を記述し、石器の正面側と裏面の２点の写真を掲載した。「むつ市城ヶ沢字大川目において、地元の人が採集した石刃を橘善光氏に寄贈」した石器であり、「背面に二条の稜をもつ硬質頁岩製の石刃で、その両側面には(中略)調整加工を加えている。石刃の半分が欠損しているため断定はしえないが、おそらく、東山型ナイフ形石器の基部、もしくは先刃形あるいは側刃形の掻器と思われる。」と記載した(注３)。

岩本(1979)は、青森県内の旧石器時代の研究史の中で、この石器については「採取地点、層位は未確認。石刃は欠損しているが、東山型ナイフ形石器の基部にみられるような調整剥離が両側縁の背面にみられる。」とした。

その後、橘は『むつ市史』でこの石器を鮮明なモノクロ写真で正面側と裏面を紹介している(橘 1992a)。大川目遺跡について「むつ市城ヶ沢字大川目に所在する遺跡で、東北地方北部の弥生前期の遺跡でもある。同遺跡で地主によって耕作中(深耕)採取された石刃」として紹介している(橘 1992b)。石器の文章記載では岩本(1978)を引用している。

２　大川目遺跡の位置と出土品

大川目遺跡は、大川目川右岸の標高 45m付近に位置する。約 1.5km 南は陸奥湾が位置し、海岸付近の角違地区には角違(１)・(３)・角違川代遺跡など弥生時代前期の遺跡が多い（図１；注４)。

青森県遺跡台帳では番号 208061 として大川目遺跡が縄文時代晩期・弥生時代前期の散布地として登録されている。

橘によると明治時代末期に耕作により、遺跡の存在が知られ、昭和 20 年代に中島全二が確認したという。そして、江

1) 青森県立郷土館　学芸課副課長・副参事（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

坂輝弥編（1958）で続縄文文化の遺跡として「角違(大川目)」が遺跡地名表に記載されているという(橘善光 1979)。

1971 年には橘を調査主担者として、むつ市教育委員会により発掘調査が行われている(注５)。調査報告では弥生時代前期の砂沢式の土器、土版、土偶頭部、石器が出土したと記載されている(橘 1979)。石器は 11 点出土し、表で計測値が記載されている。石器の一部は写真掲載されているが、石刃素材の石器はなく、文中にも記載されていない。

むつ市史の遺跡一覧表(橘 1992c)では、大川目遺跡は番号１として所在地「むつ市城ヶ沢字大川目１」、遺跡の種類「旧石器　弥生」、現状「畑　宅地」、遺物「ナイフ形石刃　砂沢式(弥生)」となっている。

３　資料の観察内容

石刃素材石器(図１－１)は、先端部側を欠失する基部側破片である。背面では並行する二本の稜線が平行する。現状でも削器として認定可能である。両側縁とも微細な剥離痕が観察できるが、それにより刃部が潰れた状態になっている。そのため、石器の装着部分と考える方が自然である。ナイフ形石器あるいは彫器または削器の基部の可能性があるが、器種を特定できない。

「大川目」の黒い注記があり(写真１－１)、細い筆で書かれたと考えたい。現存部の計測値は、長さ 7.8cm、幅 2.9cm、厚さ 1.0cm で重量は 23.7ｇである。

白黒写真で見たときは、石材の持つ縞模様が写り、やや軟質である可能性も考えた。

実見すると、光沢のある良質な珪質頁岩である。器表面は風化している。

一緒にプラスチックのケースに収納されていた削器(図１-2)は、器表面の状況は新しいとはいえないものの、石刃素材石器の方が明らかに、より古い。縄文時代あるいは、本遺跡の主体をなす弥生時代前期の砂沢式期のものと考える。縦長剥片素材であり先端部付近の裏面に黒く「大川目」と細さ 0.1mm 程度の注記がある(写真１－２)。ペンで黒インクを使用して書かれた可能性がある。黒色の石器に黒色で注記され、文字サイズも小さかったためか、バルブ付近に「角違大川目」と白くポスターカラーでも注記されている。計測値は長さ 6.1cm、幅 1.9cm、厚さ 0.7cm、重量 7.3g である。

同一遺跡から採集された２点の石器の器表面の風化状況が異なっており、石刃素材の石器の古さを伝えるものとなっている。

４　下北半島の彫器

下北半島では東通村を除くと旧石器時代の遺跡や遺物の資料紹介は少なかった。特に、彫器は報告例が少ない。

ナイフ形石器から最終的に彫器に転用されている例として、むつ市内田(２)遺跡例が知られている（図２－２)。

筆者も以前、むつ市川内の「桧川上畑」と注記のある彫器を岩手県洋野町種市の彫器(写真１に参考資料として再録し、写真を掲載した)とともに資料紹介した(齋藤 2004)。資料紹介では、写真や採取の状況を記載しておらず、不十分な記述であったと考える。そのため、図２－３に掲載する。これまで知られていたのは、この２点と当館所蔵の物見台遺跡出土品(図２－１)の３点であった。大川目遺跡の資料は洋野町種市の彫器の基部形状に類似していることも注意される。

そして、これらの彫器と大きさが異なるのが、物見台遺跡の彫器である。物見台遺跡から報告されているナイフ形石器や削器も石刃素材ではあるが小型である。時期的な違いを反映している可能性がある。

江坂輝弥(1967)は「下北で土器文化以前の石器類は尻屋崎に近い物見台遺跡からナイフ・ブレードが数点発見されているほか，川内町檜川上畑，むつ市田名部町最花などからも発見されている。しかしいずれもまだわずかな資料の発見にとどまり，計画的な発掘調査の行われたものはない。」と記載している。むつ市最花の石器とともに、むつ市川内の桧川上畑の石器出土地点と、その内容が気になるところである（注６)。

それらの過去に記載された旧石器時代の石器の情報をはじめとして、今後、新たな資料が増えることを期待したい。

おわりに

本稿では、大川目遺跡の石刃素材石器を紹介するとともに、下北半島の彫器について若干の考察を行った。石刃素材石器の器種は不明であるものの、今後の資料の発見により、それを知る手がかりが増加することを期待したい。

また、その石器と同一のケースの中で保管されていた縄文時代以降の削器についても同一遺跡からの石刃素材石器との器表面の風化を対比でき、石刃素材石器の古さを実感できるものでである。縄文時代以降の大川目遺跡の理解のためにも、資する資料になると考える。

謝辞

本稿を書くにあたり、むつ市教育委員会の森田賢司氏から、多大なるご協力とご教示を賜りました。記して、感謝申し上げます。

注釈

(注１) 1959 年に芹沢長介は「ナイフ形石器」について「ナイフの身の形をした石器である。バックト・ブレード backed blade あるいはナイフ・ブレード　Knife blade という名前がいっぱんに用いられている」(芹沢 1959)と記載した。ナイフ形石器への名称変更の経緯に関する研究史は、大塚宜明(2017)で詳述されている。1965 年には『日本の考古学１先土器時代』が刊行された(杉原編 1965)時にはナイフ形石器の名称に概ね置き換わっていたと思われる。橘が、ナイフブレードの名称を使用したのは、橘に大きな影響を与えた江坂輝弥が、九学会連合の調査報告書である『下北　自然・文化・社会』の文中(江坂 1967)でナイフ・ブレードを使用したためと筆者は考えている。

(注２) 岩本は、ロシア語の文献を読み、旧ソ連地域の石器時代についての著作がある(岩本 1962 ほか)。むつ市脇野沢や下北郡佐井村で中学教諭をしながら、考古学研究と佐井村史執筆(佐井村 1971)を行った。その後、青森県立郷土館の開館当初の研究員として活躍し、後に平安博物館助教授となった。

(注３)東山型のナイフ形石器は、「先端の正面には、主要剥離の撃打とは逆の方向からの撃打による剥離面がはいるのが通例である」とされる(加藤 1965)。しかし、(加藤が同著の図 39-１として紹介した東山型ナイフ形石器の基部側の部分と類似する事は確かであるものの)、本資料の主要剥離面は基部側ではなく、折損部分である先端部側からの剥離によるものである。風化のため、リングは不鮮明であるが、打点から末端へと向かう力によるうねりが基部側にみられる。基部側の剥離がバルバスカーのように見えるが、主要剥離面より新しい。基部側が主要剥離面の末端となる事に注意したい。

(注４) 青森県立郷土館は、大川目遺跡に近接する角違(3)遺跡で 1987 年に、発掘調査を実施した(青森県立郷土館考古部門 1988)。弥生時代の二枚橋式土器期の遺跡として調査計画されたと思われる。当該時期の土器は出土したが遺構は無く、十腰内Ⅰ式期の竪穴建物跡１棟の調査となった。筆者は、この調査に参加し、橘氏ともお会いした。氏は弥生時代の遺構が無いことを残念がっていた。筆者にとって、橘氏は思い出に残る研究者である。

(注５) 発掘調査は、「近年、耕運機等の農作業や長芋づくりによって深耕されて」いるため、昭和 46 年 10 月 30 日 (土) から 11 月３日(水)と 11 月７日(日)の計５日間、むつ市教育委員会により行われた(橘 1979)。

(注６)江坂(1965)は、「このほかまだ正式な発掘調査は行っていないが、東通村尻屋物見台、東通村母衣部の吹切沢よりの台地上、川内町檜川字上畑などからは縄文時代以前の旧石器時代の石器が発見されている。上畑遺跡は伐木の根を掘り起し中のところへ偶然出かけた畑中徳穂氏により発見され、その際伐木の根を掘り起したわきを小試掘して包含層の状態など確認された。その後、地元の研究家と東京の研究者が本遺跡を前後して二度無届で発掘を行ったようであるが、その時はうまく石器包含層にぶつからず失敗したようであったが、貴重な遺跡をみだりに発掘することは慎んでもらいたいものであると思った。」と記載している。「代木の木の根を掘りおこし」の記載は地層の深さを推定させる。

図２-３の桧川上畑の彫器について、筆者は以前、江坂の記述した石器の可能性を推定したことがある(齋藤 2009)。しかし、「中期」の文字の意味が不明であり、縄文時代中期を意味するのであれば石器の年代と整合しない。

さて、寺田氏は「採集した遺物には、採集場所と年月日を墨で記入」したという(三浦 2001)。寺田氏の墨書きの文字は、むつ市瀬野遺跡で昭和 18 年に採集した土器に「瀬野　Ｃ２の場所」と書かれている写真でうかがえる(鈴木・寺田 1993)。鈴木はＣ２とは大洞Ｃ２式の事と記載している。オホーツク土器ではないが、他に「1972.1.11　セノ　Ｃ２」の注記の記載されたものがあるという(鈴木・寺田 1993)。採取の古い時期には、採取場所と一緒にあった土器の時期を注記し、後に採取年月日を追加して記載するようになった可能性がある。寺田は無茎石鏃と有茎石鏃とでは、アスファルトの痕跡から、装着方法が異なるとする論文を発表している(寺田 1970)。アスファルト付着石器の中に「川内檜川中期」の石匙や小型石槍などが記載されている。中期は縄文時代中期をさすものと考える。寺田氏は、石器に採取遺跡と一緒にあった土器の時期を注記し、それが論文にも生かされたと考えたい。

これらから推定すると彫器の注記は「桧川上畑」・「中期」と読むのが自然である。また、この注記を書いたのは故寺田徳穂氏あるいは寺田氏と共に調査するなど、寺田氏の注記方法を踏襲された方の可能性がある。それであれば「中期」という時期情報が書かれていることが、自然に読み込める。江坂(1965)の記載する伐根地点の他、図２-３の彫器が出土した地点が縄文時代中期遺物の分布域とすれば、桧川上畑では、旧石器時代の石器が複数地点から出土していた可能性がある。

なお、桧川には上畑という小字はなく、国土地理院のホームページで公開されている過去の地図等でも確認できなかった。青森県遺跡地図にも桧川上畑遺跡の記載はなく、この遺跡名は寺田氏のフィールドネームと考えておきたい。桧川地区では縄文時代前期の遺跡として番号 208106 の桧川川代遺跡(桧川川代所在)と番号 208111 の桧川野泉遺跡(桧川稲沢所在)が登録されている。縄文時代中期の遺跡は記載されていない。

『川内町史』には「資料集(寺田徳穂氏蒐集遺物)」して、「桧川上畑遺跡」の縄文時代前期の円筒下層 d 式から中期の円筒上層 e 式までの復元土器 20 点等が写真で紹介されている(川内町史編さん委員会編 2005)。そして江坂(1967)では、下北半島の縄文時代前期の主な遺跡として「川内町桧川上畑」は円筒下層 D_2式遺物を出土する遺跡として、さらに主な縄文時代中期の遺跡としても「川内町桧川上畑」があり、円筒上層 A・B 式が出土するとされ、寺田徳穂氏蒐集遺物の時期と整合する。寺田氏の来訪者一覧の中に「慶応大学教授・江坂輝弥(考古学)」が記載されている(三浦 2001)ので、寺田

氏の資料を実見したものと思われる。

そして、この彫器は、二重パティナが観察できる。新しい剥離面は彫刀面の上にも確認できる。同じ上畑地区に旧石器時代の石器集中地点があり、石器を縄文時代中期の人が再加工した可能性もあるが判然としない。桧川上畑の彫器は図３の岩手県種市の彫器とともに、1968 年に青森県立図書館で開催された展示会に、縄文時代前期の「石槍」として出品されたことがある。その図録(青森県立図書館編 1968)では、成田祐之氏の所蔵と書かれているが、小野忠正氏もこの展示会に出品している。成田氏から小野忠正氏のもとに贈られた可能性とともに小野忠正氏所蔵を誤植した可能性がある。２点の彫器が、ともに縄文時代前期として出品された経緯は不明である。

なお、2 点の彫器の注記は、実測の時のチョークを消そうとしたときに、失われてしまった。小野忠正氏のコレクションは奈良国立博物館が多くを所有していると考えるが、注記不明の石器となっている可能性がある。筆者の不手際が原因であり痛恨の極みである。

校正中に、むつ市教育委員会の森田賢司氏から「桧川上畑」の遺跡について、ご教示を受けた。寺田氏の記録によると、上畑では円筒下層式土器と円筒上層式土器の分布域は異なり、円筒上層式期の遺物分布域に近い地点で旧石器時代のものとしての石器が採集されたようである。調査され、ご教示いただいた森田賢司氏に改めて感謝申し上げます。

引用参考文献

ア・ペ・オクラドニコフ他著　岩本義雄・大塚和義・中島寿雄・中村嘉男訳 1975『シベリア・極東の考古学①極東編』河出書房新社
青森県立郷土館 1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第８集
青森県立郷土館考古部門 1988「むつ市角違(3)遺跡調査報告」『青森県立郷土館調査研究年報』第 12 号
青森県立図書館編 1968『青森県埋蔵文化財展　目録』29 頁(写真)、43 頁(目録文字情報)
岩本義雄 1962「ソ連邦における旧石器時代住居址の研究」『考古学研究』31
岩本義雄 1977「本県最古の文化を求めて」『大昔のふるさと―古代の青森を探る―』東奥日報社　21 頁
岩本義雄 1978「下北半島の旧石器時代遺跡」『下北半島の歴史と民俗』下北の歴史と文化を語る会編　伝統と現代社
岩本義雄 1979「青森県における縄文文化以前の文化に関する研究史」『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第５集
江坂輝弥編 1958「日本各地に於ける縄文文化の変遷(編年比較表)」『地方史研究必携』地方史研究協議会編
江坂輝弥 1965「下北地方の考古学的回顧」『人類科学』17 集　43 頁
江坂輝弥 1967「下北半島の先史・原史時代遺跡」『下北　自然・文化・社会』九学会連合会
大塚宜明 2017「「Knife　blade」からナイフ形石器へ」『日本列島におけるナイフ形石器文化の生成―現生人類の移動と定着―』北海道大学出版会
加藤稔 1965「東北地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』河出書房新社
川内町史編さん委員会編 2005「資料集(寺田徳穂氏蒐集遺物)」『川内町史　原始・古代　中世　近世編』
工藤竹久 2008「橘善光さんの思い出」『青森県考古学』第 16 号
齋藤岳 2004「下北半島ムシリ遺跡採集の石刃鏃について-小野忠正氏採集資料の再評価-」『北海道考古学』第 40 輯
齋藤岳 2009「下北半島尻屋崎の物見台遺跡の彫器について-風韻堂コレクションの旧石器紹介-」『青森県立郷土館研究紀要』第 33 号
佐井村 1971『佐井村史　上巻』
杉原荘介編 1965『日本の考古学Ⅰ先土器時代』河出書房新社
芹沢長介 1959「ローム層にひそむ文化」『世界考古学体系　日本Ⅰ　先縄文・縄文時代』24 頁　平凡社
橘善光 1977「下北の先史文化」『下北の古代文化』13 頁　下北の歴史と文化を語る会(青森県むつ市)
橘善光 1979「むつ市城ヶ沢大川目遺跡」『むつ市文化財調査報告』５
橘善光 1992a「大川目遺跡」『むつ市史　原始・古代・中世編』むつ市　25 頁 (23 頁に写真図版)
橘善光 1992b「弥生時代前期」『むつ市史　原始・古代・中世編』むつ市　455 頁
橘善光 1992c「むつ市内遺跡一覧表」『むつ市史　原始・古代・中世編』むつ市　748 頁
八幡一郎編 1959『世界考古学体系　日本Ⅰ　先縄文・縄文時代』　平凡社
青森県考古学会 2008 橘善光氏略歴『青森県考古学』第 16 号
鈴木克彦・寺田徳穂 1993「本州初見のオホーツク土器」『北海道考古学』第 29 輯 25 頁
寺田徳穂 1970「ピッチ付石鏃について－矢柄へ固着する方法についての一考察-」『東奥文化』第四十一号 21 頁
田中忠三郎取材 1975「人あり　寺田徳穂氏　考古遺物一万点」『月刊グラフ青森』九月号　第一巻第六号 14 頁
三浦順一郎 2001「まちの研究者　土器の破片と言るがねし(寺田徳穂さんと語る)」『はまなす』第 15 号

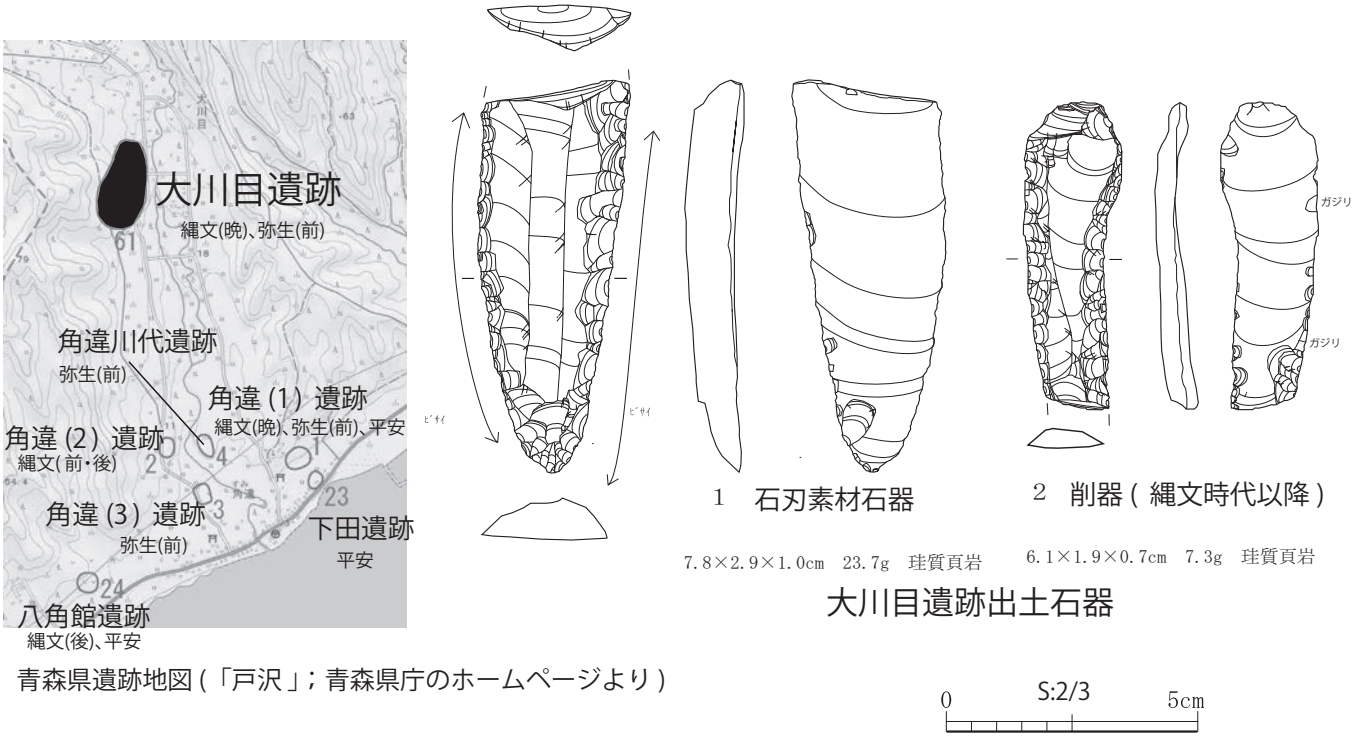

図１　大川目遺跡の位置と出土石器

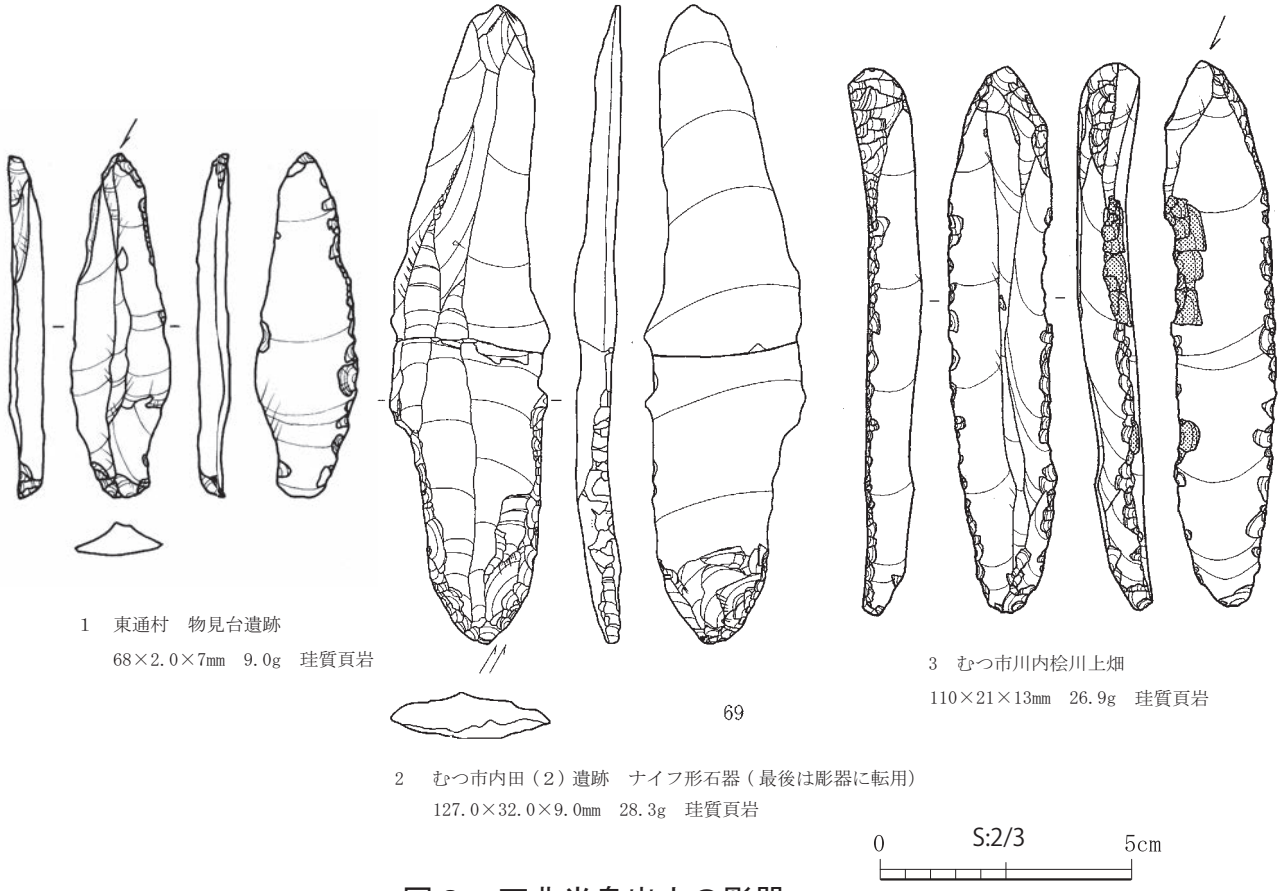

図２　下北半島出土の彫器

1

2

大川目遺跡出品

（写真は縮尺は不同）

桧川上畑の彫器

（関連資料：岩手県洋野町種市の彫器）

写真１　むつ市大川目遺跡出品と桧川上畑の彫器と関連資料